# 通りと名前と民族主義

## ―― マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891-1975）をめぐって ――

小　峰　総 一 郎

目　　次

は　じ　め　に
Ⅰ．名称変更顚末
（1）街名変更　（2）校名変更
（3）もう一人の「マリア・カーレ」と「マリア・カーレ校」
Ⅱ．マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891-1975）
―― 人と活動 ――
（1）［初期］ブラジル――敗戦，民族主義運動との出会い
（2）［中期］ヴェストファーレン――マリア･カーレの思想世界
（3）［後期］ナチ時代――教育参加・副教材執筆
ま　と　め
文　　献

民族主義詩人マリア・カーレ[1]
（1891-1975）

## は　じ　め　に

ドイツではすべての通りに名前が付されていて，日本で言う住所の「番地」はこの「通り」の「〇〇番目（の建物）」で示される（通りの一方が奇数，他方が偶数）。私の最初の在外研究（1989-

1　Bürger, Peter: „»Die Liebe zum Führer jubelnd brennt« Maria Kahle (1891-1975) als völkische Pionierin und Botschafterin des Hasses“, in: daunlots. internetbeiträge des christine-koch-mundartarchivs am museum eslohe. nr. 71, eslohe 2014, S. 12.（http://www.sauerlandmundart.de/pdfs/daunlots%2071.pdf　最終閲覧：2019/05/17）

1990,（西）ドイツ,（西）ベルリン）のときの住所は「Borstellstr. 42, 1000 Berlin 41, Deutschland」だった。これは「ボルステル通り42番（目の建物），郵便番号1000,（西）ベルリン市，郵便配達区域41,（西）ドイツ」を表す（この表記は東西ドイツ統一前。今ならば「Borstellstraße 42, 12167 Berlin, Deutschland」となる）。これはまことにシンプルだ。外国から日本に郵便を送るには「住所」を「アパートなど建物名・部屋番号，番地，丁・町村，郡市，都道府県，郵便番号，国」と書く必要がある。配達者も大変で，古い町では丁が複雑に入り組み，番地も飛んでいたりする[2]。

さてそのドイツの道路（通り）には人名を冠したものが多い。その人名は，歴史上の人物とか功績ある人物の名前である（カント通りとかショウペンハウアー通り，モーツァルト通り等々）。この「功績」の見直しの一例が，今回問題にするマリア・カーレ（Maria Kahle 1891–1975）である。

マリアは，戦前のドイツ・ヴェストファーレン州（現在はノルトライン・ヴェストファーレン州）の女性詩人である。彼女は，ナチ時代（1933–1945）にはヴェストファーレン郷土同盟（Westfälischer Heimatbund (WHB)）の編集局に勤務し，ナチズム，民族主義を「鼓吹」する詩や演劇を発表してナチス・ドイツ宣伝の一翼を担った。また，自身がかつて祖国を離れ，「敵国」ブラジルで第一次世界大戦と敗戦後の日々を過ごしたことを基礎に，「外地ドイツ人」の支援活動を行っている。文学活動の傍ら，国内のみならず，今は「外国」となったドイツの旧領土を訪れて，そこのドイツ人（「民族ドイツ人」）にナチズム宣伝活動を展開したのである。その文学的「功績」でマリアは当地の文学賞を受賞（1937年），他方，ナチス宣伝活動の「功績」は（「言葉の戦士」（Soldat der Worte）と称された），「外地ドイツ人民族同盟」（VDA）の最高栄誉「銀賞」受賞，「U–ドイツ十字章（Kreuz der U-Deutschland）受章，そしてナチ党副総統ヘス（Heß, Rudolf Walter Richard: 1894–1987）の「歓待」となって表れるのである。そのマリア・カーレは第二次世界大戦終了後，英軍主導下で行なわれたこの地の「非ナチ化」で，公舞台からの排除処分を受けるも，程なく「復活」したのだった。

その彼女の名を冠した通りがこの地方にはいくつか存在し（うち一つは戦後に命名されている。他の命名時期は不明），戦前「マリア・カーレ」の名を付した一学校は戦後もそのまま継続していた。それが近年，ナチ時代の非人間的行為を厳密に検証する「過去の克服」作業の結果，彼女の名を冠した通りの名（街名），ならびに学校名が変更されるに至っているのである。

---

2　日本の「住所」は，いわばエクセルの「絶対参照」。これに対して通りを基本とするドイツは「相対参照」である。シンプルだが問題がないわけではない。私の在外研究当時，ベルリンに「ボルステル通り」が２つあって，一度他市のドイツ人が拙宅に来るとき間違えて別の区に行ってしまったことがあった。私も，目的の住所に着いたと思ったら建物が延々と続き，目指す場所に辿り着くのに相当歩かねばならなかったことが何回もあった（役所や学校などが特にそうである）。「番地」が「△△通りの○○番目（の建物）」と記されるとき，一戸建ても集合住宅，巨大建物も区別されない。

本稿では，近年このマリア･カーレを研究したハンス＝ギュンター･ブラハト（Dr. Bracht, Hans-Günther, 1946-：元ギムナジウム校長）のいくつかの論攷をもとに，マリア・カーレの人と思想，ナチズム活動，そして教育活動について紹介したいと思う[3]。

今回参照したブラハトの論文は次の通りである。

① Hans-Günther Brach: „Maria Kahle auf Missionsreise in Südamerika 1934.“［マリア・カーレ南米特命旅行1934］In: Lippstädter Heimatblätter (in press)［以下 **Bracht ①（in press）**と表記］

② ———: „Maria Kahles Wirken in der völkischen Bewegung. Ein Beitrag zum Gesellschaftsverständnis der sauerländischen Dichterin.“［民族主義運動の中でのマリア・カーレの活動——ザウアーラント女性詩人の社会理解論考——］In: daunlot，nr. 71, 2014, S. 54-63.（In: http://www.sauerlandmundart.de/pdfs/daunlots%2071.pdf　最終閲覧：2019/05/17）［以下 **Bracht ②**と表記］

③ ———: „Maria Kahle –als Heimatdichterin und Publizistin– eine Wegbereiterin des Nationalsozialismus?“［マリア･カーレ：郷土詩人，出版人としての——ナチズムの先駆者？——］In: daunlot，nr. 71, 2014, S. 64-71.（同上，最終閲覧：2019/05/17）［以下 **Bracht ③**と表記］

④ ———: „Öffentliches Auftreten und Unterrichtsmaterialien erweisen Maria Kahle als Volkstumspropagandistin im Dienste des Nationalsozialismus (1933-1937).“［公的登場と授業資料が物語るナチズム奉仕民族主義宣伝者（1933-1937）としてのマリア・カーレ］
In: daunlots. internetbeiträge des christine-koch-mundartarchivs am museum eslohe, nr. 71, eslohe 2014, S. 72-78.（同上，最終閲覧：2019/05/17）［以下 **Bracht ④**と表記］

3　筆者（小峰）はここ数年，ナチ時代のギムナジウム（当時は上構学校）を例にナチス教育を研究してきた。その対象校が，今日のノルトライン・ヴェストファーレン州の「フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウム」である。ハンス＝ギュンター・ブラハトは当校で教員，校長をつとめた人物である。彼は，教育活動の傍らパーダーボルン大学のカイム教授（Prof. Dr. Wolfgang Keim, 1940-　）のゼミに参加，同校文書館に保存されたワイマール時代からナチ時代にかけてのアビトゥーア試験記録を掘り起こして大部な博士論文にまとめたのだった（Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998. (=Studien zur Bildungsreform: Bd. 31. ハンス＝ギュンター・ブラハト著：『民主主義とナチズムの緊張の場における中等学校制度―プロイセン上構学校事例に則した連続性問題論考』，ベルン：ペーター＝ラング社，1998年〈教育改革研究第31巻〉）。同書を圧倒される思いで読んだ筆者は2005年，2回目の在外研究の折に同校を訪れ，校長のブラハト氏から話を伺うと共にアビトゥーア試験資料もいくつかコピーさせていただいた（氏は，現在は退職し，「ザウアーラント」Sauerland と呼ばれる同州東南部丘陵地帯の宗教・社会史研究に勤んでおられる）。筆者はこのほど，氏の研究を基礎にした上記ナチス教育研究を出版する運びとなり，久し振りに氏と連絡をとった。すると氏は，その後進めているマリア・カーレ研究の成果をお送り下さった。急ぎそれらを通読したところ，その内容は大変意義のあるものであった。そういう次第で，本稿は，ブラハトの3つの公刊論文と，現在印刷中の1論文（刊行状況は現在未確認）を中心とし，これにその他の資料，インターネット資料などを参照して綴ったものである。

## Ⅰ．名称変更顚末

まず街名・校名変更等の事実状況を整理しておきたい。

### （1）街名変更

第一，街名変更について。

「マリア・カーレ」の名を冠した通り（Straße），ないし小道（Weg）の変更は，筆者の分かる範囲で次の３件である[4]。

表１．「マリア・カーレ通り」の改名（小峰作成）

| 番号 | 年 | 町 | 元街名 | 新街名 |
|---|---|---|---|---|
| ① | 2013 | Olsberg オルスベルク町＝マリアの住居・墓所（Arnsberg 行政区［の東部］，Hochsauerlandkreis 郡） | Maria-Kahle-Straße「マリア・カーレ通り」 | → Josef-Rüther-Straße「ヨーゼフ・リューター通り」に変更（Josef Rüther：マリアのかつての対立者。左派カトリック） |
| ② | 2013 | Sundern ズンダーン町（Arnsberg 行政区［の中央部］，Hochsauerlandkreis 郡） | Maria-Kahle-Weg「マリア・カーレ小道」 | → Mozart-Weg「モーツァルト小道」に変更 |
| ③ | 2014. 4. 8（火）新聞記事 | Finnentrop フィンネントロプ町（Arnsberg 行政区［の南西部］，Olpe 郡） | Maria-Kahle-Straße「マリア・カーレ通り」 | → An der Legge アン・デア・レッゲ「亜麻布試験場道」に変更 |
| 参考 | 2014. 4. 8（火）［上記③と同時］ | Finnentrop フィンネントロプ町（Arnsberg 行政区，Olpe 郡） | Josefa-Berens-Straße ヨーゼファ・ベーレンス通り［Josefa-Berens：ナチス画家・作家］ | → Alte Mark「古辺境道」に変更 |

①オルスベルク Olsberg 町＝［Arnsberg 行政区東部］――マリアの住居・墓所（Arnsberg 行政区，Hochsauerlandkreis 郡）。ここはかつてマリアが住居を構え，墓所もあるマリアゆかりの地である。ここの「マリア・カーレ通り」が，ナチ時代に彼女をきびしく批判した左派カトリック派のヨーゼフ・リューター（Josef Rüther, 1881–1972，元ギムナジウム教師）の名を冠した街名（「ヨーゼフ・リューター通り」）に取って代わられた。

②ズンダーン Sundern 町［Arnsberg 行政区中央部］――ここの Maria-Kahle-Weg「マリア・カーレ小道」は Mozart-Weg「モーツァルト小道」と名称変更。ズンダーン町は，アルンスベル

4　Vgl. Bracht①, S. 1; ROSWITHA KIRSCH-STRACKE: „Straßennamen: Fenster zur Geschichte von Frauen?“, In: daulots nr. 71, S.108 最終閲覧：2019/05/17; „Maria Kahle“（ドイツ Wikipedia）https://de.wikipedia.org/wiki/Maria_Kahle 最終閲覧：2019/05/18

ク行政区の中心アルンスベルク市の南に位置する町である。

③フィンネントロプ Finnentrop 町［Arnsberg 行政区南西部］――フィンネントロプ町は上記ズンダーン町の南方で，アルンスベルク行政区の南西部に当たる。ここの Maria-Kahle-Straße「マリア・カーレ通り」は An der Legge アン・デア・レッゲ「亜麻布試験場道」に街名変更。それは，欄外（点線）に付した「ヨーゼファ・ベーレンス通り」（ヨーゼファ・ベーレンス：ナチス翼賛の作家・画家（女性））の，Alte Mark［古辺境道］への変更と同時に行なわれた。

ちなみにフィンネントロプ町の２つの街名変更記事がインターネットにアップされている。大要は次のごとくである[5]。

「（町議会より）［フィンネントロップ町］バーメノール Bahmenohl のヨーセゼファ･ベーレンス通り，マリア・カーレ通り改名へ」

2014. 4. 8（火），ヨーゼファ・ベーレンス通りとマリア・カーレ通りの改名にゴーサイン，それも満場一致で。本件は長年の懸案で，これまで激論されたものである（『ザウアーラント伝令』既報）。将来「Alte Mark」，「An der Legge」となる。本件には，FÜR [Neue Fraktion „Für“ Finnentrop] 党首フォルマートとヘス市長との協議が前提であった。

（Sauerlandkurier『ザウアーラント伝令』2014. 4. 13）

### （2）校名変更

表２．「マリア・カーレ校」の改名（小峰作成）

| 番号 | 年 | 町 | 元校名 | 新校名 |
|---|---|---|---|---|
| ① | 2010 | シュヴェビシュ･グミュント Schwäwisch Gmünd 町（Baden-Württemberg 州 Ostalbkreis 郡） | Maria-Kahle-Schule「マリア・カーレ学校」［基礎学校＝小学校］ | → Klösterle-Schule「修道者学校」に変更［2010. 8 火災発生］ |

第二，校名変更。次に「マリア・カーレ」校の変更にも触れておこう[6]。

上表のように，ザウアーラント（ノルトライン・ヴェストファーレン州東南部丘陵地）からは相当隔たったバーデンヴュルテンベルク州のシュヴェビシュ・グミュント Schwäwisch Gmünd 町に，かつてマリア・カーレの名を冠した「マリア・カーレ学校」（基礎学校＝小学校）があった。当校はナチ時代の1936年に校名を「マリア･カーレ学校」とし，戦後もこの名を保持し続けたが，

5　http://www.heimatbund-finnentrop.de/rueckbl25.htm 最終閲覧：2019/05/18 ちなみにこの記事には紙名と日付が手書きで付されているが，その筆跡はブラハト氏のものに酷似している。

6　Vgl. „Maria Kahle“（ドイツ Wikipedia）最終閲覧：2019/05/18

2010年に Klösterle-Schule［修道者学校］へ名称変更した由である[7]（同校では2010年８月に火災が発生，被害甚大であったという[8]。校名変更との関係は定かではない）。

### (3) もう一人の「マリア・カーレ」と「マリア・カーレ校」（総合制高校，ボン）

「マリア・カーレ校」を検索して行くと，もう一人の「マリア・カーレ」に行き当たった。

こちらの「マリア・カーレ」は，ナチ時代にボン市の女教師だった人物で，本稿のマリアとは真逆の，ナチスに迫害された犠牲者である。彼女は，ナチス「水晶の夜」（1938年11月９日）に家を壊されたユダヤ人の友人を助けた（掃除）ため，子どもらは学校で迫害され，夫はボン大学東洋学教授職を追われた。のちに，イギリスに逃れロンドンに没したこの勇気あるマリア・カーレの名を，ボン市は2010年，市内４番目の総合制学校（高校）に付けたのであった[9]。

## Ⅱ．マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891–1975）
## ―― 人と活動 ――

さて，以上のマリア・カーレ通り，マリア・カーレ校の元となったマリア・カーレという女流詩人について，私は以前次のように紹介したことがある。マリア・カーレのアウトラインを，ドイツ国立図書館電子カタログとドイツ・ウィキペディアから要約したものだ。

マリア・カーレ（Maria Kahle, 1891–1975）
●ドイツの女性作家。
●鉄道官吏の娘。1913–19［1913–1924：ドイツ国立図書館データ］ブラジルの親戚宅で生活。当地で愛国的在外ドイツ主義を知り，これに傾倒。
・ドイツの大戦敗北後，南米でドイツの立場を宣伝講演。当地で第一詩集を出版。
・1920年代初頭に帰国，作家へ。「后1918年東部割譲諸州困窮ドイツ人支援東方協会」（Die Ostmarkhilfe für notleidende Deutschen in den nach 1918 geteilten Ostprovinzen）設立，支援活動を行う。
・貧困層を知るため，長く工場労働。それらの知見を報告，詩集に綴る。
・多くの民族志向の作品――ヴェストファーレン地方の生活を賛美――を著す。
・解放後（戦後），厳しい追放に遭う。作品は発禁処分。
・後年，児童青少年文学編集者として新たな成功を収める[10]。

---

7　PETER BÜRGER: „Die Liebe zum Führer jubelnd brennt: Maria Kahle (1891–1975) als völkische Pionierin und Botschafterin des Hasses“, In: daulots nr. 71, S. 28.

8　Brand Maria-Kahle Grundschule Schwäbisch Gmünd　https://www.youtube.com/watch?v=WRVhk0qo_B0（最終閲覧：2019/05/18）

9　http://www.marie-kahle-gesamtschule.de/marie-kahle-courage-zeigen/ 最終閲覧：2019/05/18
https://de.wikipedia.org/wiki/Marie_Kahle_(Lehrerin)　最終閲覧：2019/03/22

10　小峰総一郎「ライン地方のあるギムナジウム（２）　序――カーレきょうだい」『中京大学国際教養学部論叢』第７巻第２号，2015/3，p. 50.

そして，マリアの思想世界の背景を人物事典から引いた。

『仮面を脱いだ著名人』新版，2001年には，ドイツ帰国後のマリア・カーレについてこう述べられている。――1919年［ママ］にドイツに帰国後，彼女は，著述家ならびに青年運動団体「青年ドイツ同盟」（Jungdeutschlandbund）活動家として行動する。「后1918年帝国東部割譲諸州困窮ドイツ人支援東方協会」を共同設立。貧困国民層をより良く知るため工場労働者となった。その知見を報告『出来高払い女性労働者』（1930），詩集『プロレタリア女性』（1931）に著す。人民に誠実で祖国的色調の沢山の作品が，彼女のペンから生み出された；例えば「世界の中のドイツ文化」（1929），「ドイツ婦人とドイツ民族」（1934），「国境の彼方のドイツの故郷」（1934），である。彼女がとりわけ愛したのはヴェストファーレン地方，中でも，自分の祖先が生まれたザウアーラントであった。彼女はルール地方のオルスブルクに住んだ。ヴェストファーレンの土地と人々に対して彼女は，詩集「ルール地方」（1923），歴史物語「東国のヴェストファーレン農民」（1940），叙事詩「ザウアーラントの故郷の山」（1941），また戦後出版されたヴェストファーレン出のドイツ騎士団長ヴォルター・フォン・プレッテンベルクに関する作品を捧げている…[11]，と。

これに続けてマリアの中等学校と教育との関わりを述べた。私は，リューテン上構学校教育とマリアとの関わりを述べる前提作業としてこんな紹介を行ったのだった。これらは2014年８月のものである。今となっては未熟なものであるが，ブラハトの著書で初めて知った女性詩人の横顔の第一近似である。

ブラハトはその後マリア・カーレにつき，彼女の海外生活とそこでの体験，文学・詩作・思想，ナチズム推進活動に降り立って深めていた。そこで私は，ブラハトのマリア・カーレ研究を紹介しマリアの第二近似としたいと思う。

### （1）［初期］ブラジル――敗戦，民族主義運動との出会い[12]

#### A. ブラジル滞在（1913–1920）

・1913不幸な愛のために［失恋？］，若き女性マリア・カーレはブラジルの伯母のところに渡った。伯母はかつてドイツ滞在の時ブラジルについて夢中で話したことがあったのだ。
だが大戦の勃発で，ドイツ嫌いの叔父にドイツ語を禁止される。そのためマリアは，叔母のもとを去り，雑誌編集局で働く。文芸，ドイツ評論などを扱う。ここで彼女はジャーナル活動に着手し，詩作，戦争詩，講演等の出版に係った。

11 Prominente ohne Maske NEU – 1000 Lebensläufe einflussreicher Zeitgenossen, München: FZVerlag, 2001, S. 311.

12 以下は Bracht ①（in press）の抜粋，要約である。以下小見出し，ならびに補足［　］は小峰によるものである。

・やがて彼女は疲れを知らぬ戦争プロパガンダを行い，亡命ドイツ人たちに反響を呼ぶ。
・彼女はドイツ人移住者の通りの姿に感激する。しかし「ドイツ人であること」の希薄さに戸惑う。外国人の地で「ドイツ人らしさ」が埋没している；これは混血が影響する，と。
・同時にマリアは「失地東プロイセン」カンパ活動を行う。また自分の講演，本，雑誌論文謝礼もこれに加えた。
・1920年マリアは漸くドイツに戻る。集めた 35万マルクをヒンデンブルク将軍に贈る。ヒンデンブルクは，東プロイセンでの対ロシア戦争の英雄であった。
・ヒンデンブルクはこの金をドイツ人救援会に託した。救援会は 1921年，彼が共同設立した救援団体である。
・ブラジルからの帰還後，マリアは失地ドイツ人地域を度々訪問した。

B.　南米への講演旅行（1934）

その後ナチ時代になって，マリアは再び南米を訪れる。

①多様なプログラム

・1934年後半，マリアはＶＤＡ（Volksbund für das Deutschtum im Ausland）使節として再び南米に旅立った。ヒンデンブルクより書簡も得て。以下に，現地の新聞等を吟味してその活動を跡づけたい。但し，それら現地新聞等は，日付のないものが多い。これはマリアの遺品から見出されたものである。
・マリアは，外地ドイツ人の元へほぼ毎日通う。中には１日２回のときもあり。そこで集会，講演を行った。現地ドイツ人の有力者，団体，あるいはナチ党により旅程が組まれた。集会，講演等は，学級や学校，あるいは移住者グループの大会合で行った。ときには文化関係フイルムの上映，これに加えて1933年の「ナチス革命」の上映もあった。

②講演内容

a）ワイマール民主主義否定

・大戦の結果，ドイツの革命とワイマール共和国――これにマリア・カーレは異なる見方。
・戦争勝利者がドイツ民族を無力化。他民族の占領軍が派遣され，これにより国境州が占領された。犯罪的政策で東プロイセンが帝国から切り離された，と。
・ドイツの美徳喪失，崩落。これは最悪の事態である（マリア・カーレ）。
・15年前，ヒトラーはこの悲惨，分断，分裂をマルクス主義者の仕業とした。
・ブラジルから帰国後，マリアはワイマール共和国動揺活動。疑似軍隊団体「機関エシェリヒ」（Organization Escherich――［市民自衛団］）に加盟。反ユダヤ人団体の「ドイツ民族防衛同

盟」，またのちには**青年ドイツ騎士団**（Jungdeutscher Orden）にも加盟した。マリア・カーレの反民主主義政治活動は1925年のローマ行に遡る。

b）ナチズムプロパガンダ

原ドイツ理想→ナチス世界観→ドイツ救済。ドイツの苦悩から救済へ。ヒトラーは７人の同志から始め→数百万人に上る。ヒトラーに一体化。ドイツ人勝利へ。

・ナチズム＝真の社会主義。・最高善＝自民族。ヒトラーは国境州ドイツ人を勝利へ導く。

・ナチズム＝内なる民族性の確立。権力政策でなく，わが民族性から発する不滅の善性を維持発展させる。・ヒトラーの偉業＝分断，分裂を克服し一つのドイツを作り上げる。

・ヒトラーは踊らされた者の所にではなく，会堂のドイツ人労働者，ドイツ人の血に語りかける→人々はヒトラーを理解し，彼に臣従する。レイム暗殺＝「嘘」，ショック。

・反対者を一掃。こうして独裁が安定するのだった。

c）人種主義思想

・マリアは，自民族としての入植をうたう。それは，下級文化段階の外国人種に対し，ドイツ人としての自覚を強固にすることである。ブラジル統合運動には反対→同運動はファシズム兆候をもつ。ドイツ人入植者に人気もあるが，それは国家を念頭におく。民族文化を共に束ねた自然の団結力ではない。民族の視点がない。これはドイツ性の分散につながる。

・マリアは，同化・混合でなくドイツ文化の伝承を求める勢力への一体化，即ち自分らの血と人種の指導者［ヒトラー］に従うべきだとする。

d）聴衆の受け止め

・聴衆の反響は大であった。曰く，マリアは第三帝国の客人；総統の治めるドイツを自覚させた；芸術，言葉。マリアはアドルフ・ヒトラーの姿を現前化させた；詩人マリアのようにドイツ・ナチズムの点火をしたのは初めてだ；ヒトラーの国を語る詩人の美しい言葉；ドイツ人になるすばらしさを述べる彼女に，人々は拍手をして止まなかった，と。

e）ドイツでの承認

・1934年後半の数ヶ月――ミッションを終えてハンブルク港で下船したとき，外地ドイツ人民族同盟（VDA）全国代表シュタイナッハーとハンブルク市部長はマリアを労った。マリアは同盟の最高栄誉の「銀賞」受賞，その後「U- ドイツ十字章（Kreuz der U-Deutschland）贈られる。彼女のナチ思想振興，第三帝国の輝かしい宣伝使命遂行，ナチス再生理想普及の故であった。

・総統アドルフ・ヒトラーに次ぐ党第二位，副総統ルドルフ・ヘスが1935年マリアを歓待したこ

とは，ナチスの側からのこの成功を根拠づけるものであった。

C．総括的評価

・ワイマール共和国時代，またナチ時代のマリアの活動につき，マリア自身による言及はない。

・だが，1934年後半の数カ月，マリアが南米，特にブラジルにおいて入植ドイツ人に対して，民主主義敵視，人種主義のナチズム講演を行ったのは各種資料に明らかである。ブルーメナウ（南ブラジル）のドイツ誌『原始林の使者』はマリアをたたえる。

・戦後の1957年に，テオドール・プレッパー宛手紙（私信）の中でマリアが，これらの活動を「誤り」だったと述べたにしても，これは疑問である。マリアは明らかに，ワイマール共和国に反対し，民族運動系活動の中でナチス支持とナチス宣伝を「言葉の戦士」（Soldat der Worte）として行なったのであった。これを，民族主義観念のもとに，30年にわたって行なっている。

・むしろ，短期の「誤り」なら，弟の聖職者ヴィルヘルムマリア・カーレに言いうる――聖職者教師 Dr. ヴィルヘルム・カーレは，1933年ナチ党入党するも，1934年勇気をもって離党していたからである――。

## （2）［中期］ヴェストファーレン――マリア・カーレの思想世界

マリア・カーレの思想世界を，彼女の詩作品から探ったのがブラハトの第三論文である[13]。

①初期詩集から

マリア（商業学校卒業，化学会社に勤務）――1913年，個人的理由でブラジルに転じた。

・帰国ならず――ブラジルの家庭や学校（当時1,000以上のドイツ人学校あり）で，ドイツ人漂流者の変化した宗教文化伝統に親しむ。

・農村の共同体生活――理想化。多くの詩作をドイツ語新聞ほかに発表。当初は匿名。

・ブラジルの連合国参戦→第一詩集『愛と故郷』（サンパウロ，1916）出版。本詩集において彼女は戦争史をまとめる。それは国家的民族性・共同体イデオロギー，軍事国家主義，ならびにゲルマンの血と土イデオロギーに彩られたものであった。

マリアの基本思想――現代文明，理性，テクノロジーに抗して家，栄誉，祖国。これを基礎として，マリアはプロパガンダジャーナル活動に取り組む。

13　Vgl. Bracht ③。ここに収められた詩とその翻訳は筆者（小峰）には難しい。しかしマリアの思想世界を理解するため，稚拙な訳を与えてみた。

・『暴れる若きドイツ』――1914年フランドルに斃れた若き志願兵の死を，パトス一辺倒にうたう。

ランゲマルクの西，イーペルに，
若きブロンドのこうべが横たわる。
それは目を見開いて，世界の行く末を知ろうと夢見ているようだ。
…
「ドイツ！おおドイツ，汝世界に冠たり！
汝　我らが聖なる祖国！」…
絶え絶えの，今際（いまわ）の喘ぎで兵は叫ぶ：
「ドイツ…ドイツ…絶対負けてなるものか！
母よ，ああこの母よ…これぞ勝利の叫びなり！
誇れよ母，…汝の…子を。今…汝のそばに横たわる」

母の犠牲心賛美，戦死した子の礼賛的賛美は，一回限りの「失言」などではない。詩集はその後ドイツでも数版出版される。『ドイツの言葉』（サンパウロ，1917）もそうしたトーンである。

それらでは死者への賛美，犠牲の美化が歌われている。

・ようやく戦争の終結とともにマリアは祖国に戻った。マリアは，祖国のための講演，集会で集めた35万マルクを，将軍ヒンデンブルクに託す。
1921年の『原始林の花』でマリアは，死に，朽ちた根から育つ花の生命を謳う。

・『ザウアーラントの歌』では宗教と敬虔を，『ルール地方』（1922）で黒い谷の自然を賛歌した。

・他方，ワイマールの危機，これの権威的解決には非難の詩。

頑固に誠実に，畑（はた）を整え国を開き，
耕地の奥深くまで畝つくる犂は一体いつ来るのだろう？
おお君，わが民よ，知れ，君の全苦悩はただ，
魂を刷新し，果実を空高く掲げたいとするだけであることを

・『民族，自由，祖国』（1923年）――ヴェルサィユ条約（1919. 6. 28）の社会，政治，経済をテーマにする。
国土割譲，戦争責任，軍縮→その結果ラインラントの占領。

…ドイツの神は，背中に罪を負っている…

・『ラインのほとりで』Am Rhein（演劇，1917）の新版（1923年）――現実の社会状況歌う。
　軍事凋落。民主化，そして複数党による政党国家。

敵の懲罰に傷つき打ち砕かれて，民は，諍（いさかい）には盲目の嵐にさらされている。
死者を照らす薄暗い松明の元で，低級野卑の連中はガツガツ淫乱に貪っている。
…ラインの上の黒き十字架。この犠牲の十字架をわれら聖化せんと欲する！

・『磔刑（たっけい）民族』（Gekreuzigt Volk, 1924年）――憎しみの詩→住民の先鋭化へ。

今，空に響く嘆きの声は，傷つけられ鞭打たれた者の血の滴り，
あざけりと嘲笑，そして乙女らの発する陵辱の涙。
今こそ響け，ドイツ人の自覚，
報復と怒りをこそ！　徹底的に！
この誓い，忘れる者を悲しめ！
フランスへの復讐だ！

1923年のミュンヘン一揆に寄せて歌う（→のちマリアの演出した『総統派一団』に所収）。

「アドルフ・ヒトラー，
君は連隊長シル［対ナポレオン戦の英雄］のごと，
熱きみなぎる勇気もて，燃える心で敵地に飛び込んだ！
ああ尚早なり，重冷ドイツ人の血に
君の炎が乗り移るには
…
君が行動の発した火は，噴出する炎となり
今，我らは解放の剣たらんと欲する！
他日君は誇らしく，我らを弟妹と呼ぶことだろう」

**②民族主義集団の大きな賛同**

マリアのこの詩は民族主義派に熱狂的に迎えられた。このレトリックでマリアは，「リーダー，開拓者」，「青年ドイツ希望の使者」，「故郷，誠実，犠牲のハーモニー」等と称される。

↓

・ヒルデスハイムの騎士団集会に4,000人。「詩人は瀕死のドイツにメスを入れた」＝非合理の美化。
・マリアの詩＝「物質主義に傷つき病んだ精神に，最もドイツ的な女性からの愛の励まし」

↓

「君の星に従い，ドイツ民族の再生を」

③青年ドイツ騎士団の活動家

マリアは以後，民族派集会に頻繁に登場。

やがて２つの詩集――青年ドイツ騎士団出版部より刊行（1923年：団員20万人）

このときマリアは騎士団をこう述べた：

「他のカトリック教徒・司祭と共に，青年ドイツ騎士団員はドイツの民族的精神的再生へ闘う」

・「青年ドイツ騎士団」（当時鉄兜団と共に最強の院外団体）――マリアは同団雑誌（1924年から日刊紙化）編集部へ。持論を同紙に発表することとなった。

④反ユダヤ人傾向

・マリアは大都市の精神＝異民族文化とする。文明批判→反ユダヤ主義。

「自民族の血により→同胞は未来を安寧とする」

「数十万の異人種の家と街→ドイツ精神が入れ換えられかねない」

かくしてマリアは，あらゆる悪の根源は人種主義的に分析されなければならぬとする。

「東ガリチアの根無し草漂流民［ユダヤ人］，この寄生植物はドイツの木に生い茂り，養分と力を吸い取り，やがてドイツ性を涸れさせる」

⑤民主化拒絶

皇帝派・ヒトラー派のマリア――十一月革命不信，皇帝に賛歌を贈る。

・また，ヴェルサィユ条約に反対，連合軍のルール占領を批判。

・マリアの共感――ルール占領に抗して死んだ抵抗運動家シュラーゲター Schlageter であった。

⑥左派カトリックのマリア批判

すでに初期から――出版でマリアは郷土美化，国家主義，反民主主義，戦争賛美，死を宗教的に過大評価していた。

↕

ヨーゼフ・リューター（Josef Rüther, Brilon のギムナジウム教師）――これを否定。マリアの自然叙述＝「不調和，センチメンタル」とする。

・「憎悪の国家神を誇示」する民族生活新理想→「民主政治家殺害を煽動するもの」。聖職者もこれと僅かしか隔たってはいない。

・出版物で説かれる古ゲルマンの英雄パトス――最底の民族本性。彼女はこれを駆り立てる。

↕

・騎士団のリューター批判：「価値無い駄弁。メフィストフェレス的，ユダヤ式やり方で平信徒と

司教団を興奮・憤慨させるのが目的」＝分析の正しさを逆に証明

・司教たち――騎士団との距離を表明→これがマリアの民族派グループ［騎士団ほか］外への進出・登場を抑制ないし阻止した。

⑦まとめ

●マリアの詩と出版活動を通して判明したこと

――ワイマール時代初期から民族主義宣伝者であったということである。

・自然詩，並びに宗教理解は凡庸な決まり文句

→それが国家主義政治イデオロギーと結合

⇩

爆発力を備え，公的舞台への登場に至る

↓

これが結果的に，ワイマール体制の不安定化へ作用。

それとともに，ナチズム＝農村カトリック住民に受容されて行ったのだった。

検証の必要性

①ヒトラーの登場＝マリアは「名誉とした」のであるか。

②マリアは，ナチ・システムに統合したのであろうか。

確かなこと

①1935年マリアは**副総統［ルドルフ・ヘス］**に歓待されている。

②1937年**ヴェストファーレン文学賞**受賞（政治的受賞）。

③**ヴェストファーレン郷土同盟（Westfälischer Heimatbund（WHB）：［1915設立，本部：ミュンスター］）**編集局に勤務。

④「郷土と帝国」Heimat und Reich［WHB 中央機関紙1934-1943，月間］での諸出版。

⑤各種副教材の執筆1933-1935。

⑥著書『ドイツ人女性とその民族』Die deutsche Frau und ihr Volk，『故郷・異郷を結ぶドイツのこころ』Deutsches Herz zwischen Heimat und Fremde，『ブラジル迂回』Umweg über Brasilien 等。

⑦『ヴェストファーレン日報』Westfälische Tageszeitung，（1943）での論説。

→［これらからするならば］

①「ナチズムについて誤解していた」（［戦後の非ナチ化での弁明］）ということは無い。

②ナチ体制の一翼を積極的に担った。

興味深いこと

●マリアは，戦後自分自身でナチズム総括をしたのか。

いずれにせよ，マリア・カーレの多くの作品群を見たとき，これを次のように纏めうる：マリア・カーレにおいては，まず初めにカトリック的保守主義――過去のロマン主義的理想化による――が存在し，次にこれが生物・人種主義に基礎を置く郷土・民族思想と出会ったものである，と。

後史

①「マリア・カーレ」名の通り名に疑問が呈せられていること（例：ベックム Beckum）。

②同様の事例――ブリロン Brilon の「Carl Diem 通り」は，最新の研究に基づき名称を改めている。（カール・ディエム――ナチススポーツ専門官。彼は1945年３月，ヒトラー・ユーゲント団員をベルリン最終戦に送った）

### （3）［後期］ナチ時代――教育参加・副教材執筆

私［小峰］にとり，マリアの活動で特に注目されるのが教育・学校との関わりである。

彼女は，リューテン上構学校の「外地ドイツ人協会」（Verein für das Deutschtum im Auslande）主催の講演会で，自身の南米生活を振り返り民族ドイツ人支援を訴えるとともに，ワルター・フォン・プレッテンベルク祭にも登壇。さらに，同校の校外宿泊プログラム「民族政治科実習」（Nationalpolitische Lehrgänge）に加わりベルリン行にも同道している。マリアの詩作はまた，同校のアビトゥーア試験でも引用されるのだった[14]。

そのマリアは，パーダーボルン市の出版社シェーニング社（教育出版社として有名）から，「副教材」（Arbeitsbuch: 教科書を「補う」教材パンフレット）を何冊か執筆している。（ちなみに，ヒ

14　1937年の UI アビトゥーア試験の口述試験テーマに「ドイツ現代の民族的な詩につき述べよ」，との出題があった。生徒は本問に対し，マリア・カーレやシーラッハ（Schirach, Baldur Benedikt von: 1907–1974. ヒトラー・ユーゲント指導者・ライヒ（帝国）青少年指導者）を引いて自身の考える処を述べている（Vgl. Bracht (1998), S. 529–530）。同校教育へのマリアの積極参加は，弟の Dr. ヴィルヘルム・カーレ（聖職者）が同校教師（宗教，ドイツ語）だという個人的関係によるというよりも，マリアが，この地方の文学者で，積極的なナチズム運動家という公的理由によるものであったろう。マリアは，同校への教育参加を自らの使命と受け止め，これに主体的に関与したのである。

トラーの政権掌握〈1933. 1. 30〉後，教育が直ちにナチス化したのではない。教科書はワイマール時代の民主主義的な内容のものが使用されていた。これに対しナチ党は，まずナチズム理想（人種学，ナチス歴史観，ヒトラーの擡頭・独裁）を主内容とする簡易教科書〈「教本」〉を御用学者・文化人に執筆させ，いち早く現場に普及させたのだ。授業ではこれを実質的な教科書とし，他方で教員には「ナチス教員連盟」（Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB）の授業統制を行って，段階的に教育をナチズム化して行ったのである[15]。マリアの執筆した副教材は，この「教本」よりもさらに小さな教材パンフレットであろう）。

ドイツ国立図書館カタログに当たったところ，「ドイツ人同胞」シリーズは全７巻で，うち次の４冊がマリアの著作となっている。それらはいずれも15ページである。

表３．マリア・カーレの執筆した副教材（ドイツ国立図書館カタログより）[16]

| 番号 | カタログ書名 | 和訳 |
|---|---|---|
| 1 | Schöninghs Arbeitsbogen für den Deutschen Gesamtunterricht<br>Teil: Reihe: Deutsche Brüder / Nr. 1., Deutsche Brüder u. Schwestern im Auslande / von Maria Kahle Erscheinungsdatum: [1933]<br>15 S. | シェーニング社ドイツ語総合授業副教材『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 1,<br>マリア・カーレ『外地のドイツ人兄弟姉妹』［1933］<br>15ページ |
| 2 | Schöninghs Arbeitsbogen für den Deutschen Gesamtunterricht<br>Teil: Reihe: Deutsche Brüder / Nr. 2., Blutendes Grenzland u. deutsche Treue / Von Maria Kahle Erscheinungsdatum: [1933]<br>15 S. | シェーニング社ドイツ語総合授業副教材『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 2,<br>マリア・カーレ『血を流す国境地方とドイツ人の忠誠［！］』［1933］<br>15ページ |
| 3 | Schöninghs Arbeitsbogen für den Deutschen Gesamtunterricht<br>Teil: Reihe: Deutsche Brüder / Nr. 4., Deutsches Heldentum jenseits d. Grenzen / Von Maria Kahle Erscheinungsdatum: [1934]<br>15 S. | シェーニング社ドイツ語総合授業副教材『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 4,<br>マリア・カーレ『国境のかなたのドイツ勇者精神』［1934］<br>15ページ |
| 4 | Schöninghs Arbeitsbogen für den Deutschen Gesamtunterricht<br>Teil: Reihe: Deutsche Brüder / Nr. 7., Maria Kahle erg[z]. von ihrem Besuch bei d. dt. Siedlern in Brasilien Erscheinungsdatum: [1935]<br>15 S. | シェーニング社ドイツ語総合授業副教材『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 7,<br>『マリア・カーレ，ブラジルのドイツ人入植者訪問を語る』［1935］<br>15ページ |

15　小峰総一郎「「教科書」考―日独瑞の社会科教科書から―」『中京大学教師教育論叢』第８巻，2018/３参照。

16　https://portal.dnb.de/opac.htm?query=Maria+Kahle+Arbeitsbogen&method=simpleSearch 最終閲覧：2019/03/27

ブラハトの第四論文は，この「教材パンフレット」作成の経緯を述べ，実際に3冊の「副教材」を引きながら内容分析を行なった貴重なものである。以下，ブラハトの論を見てみよう[17]。

### A. ナチズムの中のマリア・カーレの公的な位置

・マリア・カーレは1933年，民族主義宣伝者としてチェコスロバキアに講演旅行を行なった。しかし，彼女はそこで「わが民族の敵に捕えられ，かつてはドイツだったこの地から放逐されたのだった」（Vöpel「マリア・カーレ――あるドイツ女性・詩人」in:『**郷土と帝国**』1937）。

・また，1934には，外地ドイツ人民族同盟（Volksbund für das Deutschtum im Ausland: VDA, 1933）の要請で南米にナチス講演。6ヶ月後帰国。

・これら民族ドイツ人への活動により，マリア・カーレは，VDAの最高賞たる**銀メダル（Silberne Plakette）受賞**。体制にとり外地ドイツ人宣伝のもつ意義は，「マリアは**副総統ルドルフ・ヘスに歓迎**され，南米行の報告をした」との記述から窺うことができる（「小展望」『郷土と帝国』1935）。

・マリア・カーレはまた，**ヴェストファーレン郷土同盟**（Westfälischer Heimatbund (WHB)）で活動。同会長の州首相コルボウは，自身の全力をナチス理想に捧げ，会則が言うように「ヴェストファーレン人を自覚的なドイツ文化の担い手――ナチス理想という意味での――に育てん」とする人物であった。

・1935年設立の**同盟専門部**「世界の中のヴェストファーレン」で，マリアの作品『郷土の手紙』編集。10,000部中数千冊が同盟の買い取りだった。旧ヴェストファーレン人で「これ以上の外国化を防ぐべき」2,000人だけは［外地ドイツ人 or 引揚者か――（小峰）］，専門部が面倒を見た［支給した］。彼らの反応からマリアは「血の声」を，取り分けブラジルからの一女性の声を反芻する：「全員がアドルフ・ヒトラーだけを愛するのは，彼が，ドイツ救済のために神が遣わされた存在であることを深く確信するからなのだ」と。

・1937年，マリアが第2回ヴェストファーレン文学賞受賞と決まったとき→知人ら大いに疑義。コルボウ会長（Karl-Friedrich Kolbow, 1899–1945；当時州首相）はマリアを擁護。彼女はヒトラー・郷土・ドイツ民族性を描くと。ベルゲンタール（Josef Bergenthal, 1900–1982；編集長）も彼女を擁護した。受賞スピーチで彼女はザウアーラントと土を聖化している。

---

17 Vgl. Bracht ④.

## B. 学校授業のための副教材

・ナチスの権力掌握で新教則と新教科書の課題，とくにイデオロギー教科の課題が出てきた。それは地理，歴史，郷土科，等々である。旧教科書と共にこれを補足する新教材――執筆者，出版社がいち早く制作し活用できる――の必要が生じた。

・このためマリアは，シェーニング社（パーダーボルン）の小冊子副教材を執筆。彼女はヨーロッパ，ブラジルへの旅からそれの歴史・地理を紹介，ワイマール共和国批判，またナチズム理想も込めながら叙述したのである。こうしてワイマール時代の民主主義的教育内容が転換して行ったのだった。

Schöninghs Arbeitsbogen / Herausgeber: Dr. Th. Schwerdt
Reihe: Deutsche Brüder Nr. 7　　Best.-Nr. A 67

Maria Kahle
erzählt
von ihrem Besuch
bei den deutschen
Siedlern in Brasilien

Dr. Th. Schwerdt（編）「シェーニング社副教材」『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 7,（Padeborn, 1935）

注文番号 A 67

『マリア・カーレ，ブラジルのドイツ人入植者訪問を語る』[18]

［全15ページ――小峰］

図１．副教材『マリア・カーレ，ブラジルのドイツ人入植者訪問を語る』表紙

・マリアは，ヨーロッパ諸国に住む外地ドイツ人を極論化して描く；ドイツ人の集落は，現地住

18　daunlots. nr. 71, S. 74.　写真も。

民の不潔な家々と大いに異なる。しかし彼らはドイツ語を忘れてしまうであろう――今日の外地ドイツ人民族同盟によるような支援がないならば。彼らが子どもに身につけさせた徳（特に南米で）――勤勉，秩序精神，我慢強さ，忍耐力，正直，誠実，清潔，精神の活発，敬神，信頼;これらはドイツ人の遺伝素質だ。北米ではアングロサクソンとの親近性のため，アメリカドイツ人はドイツ特性を保持していないのに対し，南米のドイツ人は，他人種――スラブ系ポーランド人，チェコ人，またイタリア，ブラジル人――とは大いに異なる，と。

・ハインリヒ・レルシュ，アグネス・ミーゲル，シュテファン・ゲオルゲ（入植者愛好）の詩が，あこがれの郷土とドイツ精神をたたえる。原始の森の小さな学校で，彼らはドイツ民族の歴史を，高貴な目標めざすドイツ人の苦闘を聞く。

・そして大戦を，ランゲマルクの闘いを，U ボート海戦を，タンネンベルクの戦いを聞く。また，ドイツ植民地に置き去りにされた人々の孤独な闘いを聞くのである，と。

→だが，マリアには数十万人の戦死者のことは語られず。

→代わって語られるのは，戦争の勇者たちだった。

・そして，この大戦の経過の中で，ドイツにおいては新しい共同体が，未曾有の犠牲で築かれた共同体が人々の中に生まれた。これと同様に，外国ドイツ人もまた同胞との，祖国との一体感を体験したのだ，と。

→だが，無残な敗戦，革命，ワイマール共和国。その後の国内の困難。これがドイツ国内の分裂，裏切りに帰着したとする。マリアは皇帝退位，民主化，党派分裂――ワイマール共和国の核心を，こう表現したのだった。

・他の一冊は英雄的グードルンの歌。

| |
|---|
| Dr. Th. Schwerdt（編）「シェーニング社副教材」『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 4, (Padeborn, 1934)<br>注文番号 A 43<br>『国境のかなたのドイツ勇者精神』[19]<br>［写真略］<br>［全15ページ――小峰］ |

この中でマリアは，ヒトラーを救世の指導者とする。民主主義廃止，独裁，社会主義者放逐は「新しい意思」,「新しい愛」だとする。

・神話的・英雄的な叙述は，外地ドイツ人についての叙述でも基調となっている。

19　daunlots. nr. 71, S. 75.

Dr. Th. Schwerdt（編）「シェーニング社ドイツ語総合授業副教材」『ドイツ人同胞』シリーズ Nr. 2,（Padeborn, 1933）

マリア・カーレ『血を流す国境地方とドイツ人の忠誠！』[20]

［全15ページ――小峰］

図２．副教材『血を流す国境地方とドイツ人の忠誠！』表紙

・外地ドイツ人＝血で母国の民と繋がる。地図の国境がドイツの終点なのではない。

・マリアは生徒に呼びかける，民族ドイツ人のように，わが民族のために生き，働き，犠牲となることを，と。

「死して成れ」

・副教材の中でマリアは述べる；ブラジル入植ドイツ人800,000人以上＝特に原始の森での入植に苦労，貧困。世界中の100万人のドイツ人に国境なし。

・ワイマール革命→女性参政権→党派争いの民へ。これはドイツ的生活の喪失につながった。

・これに対し，ヒトラー――人々を統一。ドイツのために全人生を捧げる。国境は民族の境界で

20　daunlots. nr. 71, S. 76.　写真も。

はない。

・マリアの文章全体――生徒が，自分に語りかけられるごとく感じる文。大戦の［負の］遺産の中，ドイツへの犠牲を説く。そこにワイマールの成果は言及されない。

・指導者，民族共同体＝真実。外地ドイツ人――ナチスとヒトラーに期待された存在なのだ，と。

・副教材――生徒たちのナチ世界への適応を説くもの

①一面的教材　②歴史に逆行する解釈　③プロパガンダ的事例結合

↓

・ドイツ人の理想としての犠牲，誠実，献身，義務が導かれ，若者は「新時代」，「偉大な総統」のための存在と期待されるのである。

C. 総括

・1933年ヒトラーへの政権移譲ののちも――マリア，多くの本，論文，演説でナチスプロパガンダを行った。民族性思想，民族共同体の宣伝者として。

・外地ドイツ人を民族ドイツ人として――この体制の中への位置づけを求めたのである。

・1935-37年――マリア，詩人として副教材を執筆。ナチストたちに求められる＝「民族の命令者，予言者，教育者，闘争者」となったのだ。

・外地ドイツ人に――故郷，新しい祖国，総統を告げる詩人，また権化。

・マリアの詩作―― 一貫している。ナチ台頭でも変わらず。

・1924年――すでにヒトラーに捧げる詩作をなす:「他日君は誇らしく，我らを弟妹と呼ぶことだろう」と。

・1937年以降のマリアの教会弾圧，テロ等への関与――不明。

確かなことは，民族と民族共同体の宣伝者であるということ。「犠牲，戦線共同体の鼓舞者」であったということ。

1939. 12. 28. ――彼女はナチ党入党申請を行ったのであった。

## ま　と　め

さて，以上ブラハトによる３編のマリア・カーレ論文をオーヴァーヴューして，筆者（小峰）には新たなるマリア・カーレ像が見えてきた。

まず，マリア・カーレその人について。私は今までマリアについては，点としてとらえるのみ

であった。それが，これら論攷を通して，線としてのマリア（マリアの形成史――人間・女性，詩人，外国ドイツ人，ザウアーラント人，そしてナチストとして），そして面としてのマリア（マリアをとりまく時代，人々，結社，政治，社会，文化）という広がりの中で「マリア・カーレ」を捉えることができた。商業学校を出た夢多き一人の女性，それが外国（ブラジル）でドイツ人同胞と接し，改めて自身のドイツ性を再発見する。他方，祖国と切り離された「外地ドイツ人」に，ドイツ性ドイツ文化喪失の危機感を抱く。その中で詩作・講演に着手した。このような中で迎えた祖国敗戦とヴェルサィユ体制。1920年に帰国して体験したドイツの軍事的凋落と社会経済的苦境。マリアは失地東方の救援活動を展開すると共に，反ヴェルサィユの社会運動団体に参加（青年ドイツ騎士団ほか[21]）。ナチズムと指導者（Führer ＝ヒトラー）の中に祖国の未来を見出すのだった。これらを通して，マリアは必然的に「民族主義詩人」となって行った。以後彼女は詩人として，またジャーナリスト・社会運動家として，この指導者とナチズムを鼓吹する活動に突き進んで行ったことが理解されたのである。私の今までの「ナチス詩人＝マリア」とするステレオタイプ的マリア像から，マリアを時間縦断的，また社会横断的変化の中で生成して行ったトータルな「マリア・カーレ」として捉えられるようになったということである。

次に，このマリアに南米行を指示した「外地ドイツ人民族同盟」（Volksbund für das Deutschtum im Ausland: VDA, 1933）ならびにナチス「外地ドイツ人」戦略についても，理解を深めることができた[22]。マリアの演説は，自身の体験，見聞をもとにドイツ人としての自覚，ナチズムへの支援を熱情的に訴える秀逸のものであったのだろう（**「言葉の戦士」（Soldat der Worte）**と称されるほどに）。報道によれば，彼ら外国に暮らすドイツ人（外地ドイツ人）は，祖国からの使者の呼びかけにドイツ人・ドイツ民族としての自覚を新たにし，祖国とその指導者（Führer ＝ヒトラー）へ

---

21　ここでは触れられなかったが，ブラハトは第二論文で，彼女の民族主義団体との接触を述べている。すなわち，①前線戦士会議への出席，②農民によるドイツ再生をめざす「農民大学」への参加（ここで彼女はタンツマン Tanzmann を積極評価する［タンツマン＝反ユダヤ主義，農民大学創立者・アルタマーネン同盟共同設立者。田園都市ヘレラウで活動。山名淳『夢幻のドイツ田園都市』（ミネルヴァ書房，2006）参照］，③そして遅くとも1923年までに青年ドイツ騎士団と接触，と（Bracht ②, S. 56）。［**「青年ドイツ騎士団」（Jungdeutscher Orden: Jungdo）**――1920年設立の中道右派のドイツ民族主義団体。プロイセンの基礎となった「ドイツ騎士団」にちなむ。団長 Hochmeister アルトゥール・マーラウン Artur Mahraun。ワイマール体制反対，反ユダヤ主義。会員は保守中流青年を中心に10-15万，鉄兜団に次ぐ。岩崎好成「青年ドイツ騎士団団長 A. マーラウンの政治思想」『山口大学教育学部研究論叢 第１部 人文科学・社会科学』1990，参照。］上記諸団体・運動のイデオロギーは，いずれも，「民族至上主義（フェルキッシュ）」と言える。田村栄子『若き教養市民層とナチズム』（名古屋大学出版会，1996）参照。

22　「外地ドイツ人」の民族所属，文化自治については筆者の下記前著参照。私はそこにおいて，新生ポーランドに残留した「ドイツ系少数民族」の，ドイツ語・ドイツ文化の教育をめぐる問題を取り上げた（小峰総一郎『ポーランドの中のドイツ人――第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育――』（学文社，2014））。

の思いを熱くしている。帰国してのち，「マリアは副総統ルドルフ･ヘスに歓迎され，南米行の報告をした」，これは「体制にとり外地ドイツ人宣伝のもつ意義」［が大きかったこと］を表す，とブラハトは述べている。これは，1933年に再編強化した「外地ドイツ人民族同盟」の，ナチ党での位置づけ・使命に関わることである[23]。マリア・カーレの「南米特命旅行」は，ナチス・ドイツが外国の「民族ドイツ人」（„Volksdeutsche“）を束ねて，彼らを世界支配戦略に動員することを企図したものであった。副総統ヘスの「歓待」は，マリアがこの使命を成功裡に展開し，のちの先例となる成果をあげたからだと言えよう（マリアの，この民族主義活動の一件は，今まで全く知られていなかったとのことである[24]）。

そして第三にマリアの教育関与である。

私は近著『ナチスの教育』（学文社，2019）で，マリアの教育関与について，特に「民族政治科実習」（Nationalpolitische Lehrgänge）との関連に注目した。「民族政治科実習」とは，ナチス「キャンプと隊列の教育」を象徴する教育形式である。この「ラガー教育」は，学校での「教師－生徒関係」の中で展開される文化・教養の系統的学習を否定し，学校田園寮宿泊（体錬・講演・余暇造形を軸とする）を通して行なわれる教育（錬成）を目的とする。それは，ラガーで生活を共にする中で形成されるエモーショナルな協同体 Gemeinschaft を小さな「民族協同体」と捉え，これを指導者（Führer ＝ヒトラー）に導かれる大「民族共同体」（Volksgemeinschaft）の不可欠の構成要素だと体得させる訓練形式である（このナチズム世界観教育は，教師の「指導」ではなく，ナチ党の信任を得た「ヒトラー・ユーゲント」Hitlerjugend によって担われなくてはならな

---

23　私は近著で当同盟につき次のように述べた。

「外地ドイツ人協会」（Der Verein für das Deutschtum im Auslande）の略史は次の通りである。

●元々：「全ドイツ学校協会」――1880にウィーンで「ドイツ学校協会」（Deutscher Schulverein）設立。これのベルリン支部が1881. 8. 15決議，帝国ドイツ内約50のバラバラの支援組織を「全ドイツ学校協会」に統一をと。「全ドイツ学校協会」は，外国ドイツ人支援を「ドイツ学校協会」のように墺洪帝国内に限定せず全世界ドイツ人に広げるとした。同会設立4年後に（1885末）会員はドイツ帝国に12,000，支部は140に及ぶ。1923には州協会13，支部600，会員360,000，諸学校700。

●大戦後ヴェルサィユ条約・サン・ジェルマン条約で国境変更，住民移動行われ，保守・民族主義化。外務省の財政支援も得て，同会は，1920年代の国境再変更めざす反動的・ドイツ民族主義的運動の一翼に連なる。同会は，あらゆる手段で「外地ドイツ人」保全闘争を推進した。当時会員は250万人。

●1933: Volksbund für das Deutschtum im Ausland（「外地ドイツ人民族同盟」：これも VDA）「外地ドイツ人民族同盟」はナチ外国部門（エルンスト・ヴィルヘルム・ボーレ部門長（Ernst Wilhelm Bohle 1903–1960））に下属。ルドルフ･ヘス（Rudolf Walter Richard Heß, 1894–1987）がこれを統括。1935年に「VDA と「民族ドイツ人評議会」（Volksdeutscher Rat, 1933設立。Karl Haushofer 代表）は，ヨーロッパ・アメリカの「民族ドイツ人」（„Volksdeutsche“）保護につとめ，「外国ナチ党（NSDAP/AO）」が，外国の「帝国ドイツ人」（„Reichsdeutsche“）・海外の「民族ドイツ人」を［すべて］保護するものとする」とした。（小峰総一郎『ナチスの教育――ライン地方のあるギムナジウム――』学文社，2019，124ページ）

24　Vgl. Bracht ① (in press), S. 1.

いとする）[25]。

マリアは，再度訪れた南米で外地ドイツ人を前にナチズム講演を展開する。マリアの声は，聴衆（「民族ドイツ人」）にはさながら指導者（Führer ＝ヒトラー）の声のごとくに受け止められ，彼らはここで祖国と繋がる「民族共同体」（Volksgemeinschaft）を実感したことであろう。これも一種の「民族政治科実習」である。

マリアは，この南米体験を含め４冊の簡易副読本を執筆した。私は，ブラハトの論文でその事実を知ることができた。学校現場では，恐らく既存教科書を押しのけてこの簡易本によるナチズム教育がなされたのであろう。少し後の数字であるが，1937年には学校現場の「ナチス教員連盟」（Nationalsozialistischer Lehrerbund: NSLB）比率は97％であった[26]。殆どの教員が「ナチス教員連盟」員であった教育現場では，「連盟」の指示の下，ギュンター（Günther, Hans Friedrich Karl: 1891–1968）の「遺伝学」やブルハルト（Prof. Dr. Albrecht Burchard, 1888–1939）の「地政学」[27]，フォルカース（Johann Ulrich Folkers, 1887–1960：ロストック教員養成大学歴史学教授）の「生存圏」論が，有無を言わさぬ形で教えられたものと思われる（「連盟」の指示に反した教員は退職を余儀なくされていた）。副読本は，一方でドイツとドイツ人の徳と偉大さを述べ，他方で，敗戦後のヴェルサイユ体制がドイツとドイツ人を苦境に追いやっているとし；今，ドイツ人は国境を越えて連帯し，指導者ヒトラーと共にこの苦境を脱せよと力説する。マリアのナチズム教育関与は，詩・戯曲，講演，民族政治科実習，副読本執筆と，多面的に行われていたのであった。

ブラハトはマリアの初期作品を通して彼女の思想世界を分析しているが，私には詩の味読，作品評価はできない。ともあれブラハトは，マリアの思想世界は「まず初めにカトリック的保守主義――過去をロマン主義的に理想化――が存在し，次にこれが生物･人種主義に基礎を置く郷土･民族思想と出会った」とする。それによって，これらは「爆発力を備え，公的舞台への登場に至る；それは結果的に，ワイマール体制の不安定化へ作用し…ナチズムは農村カトリック住民に受容されて行った」と分析している[28]。マリア・カーレの思想と作品は，こうして社会的な力を備え，ナチズム普及推進の有形力となったとするのは私には説得的であった。

---

25　小峰『ナチスの教育』，第３章，補論，参照。

26　Saskia Müller, Benjamin Ortmeyer: Die ideologische Ausrichtung der Lehrkräfte 1933–1945 : Herrenmenschentum, Rassismus und Judenfeindschaft im Nationalsozialistischen Lehrerbundes : eine dokumentarische Analyse des Zentralorgans des NSLB. Weinheim: Beltz, 2017, S. 13.

27　ちなみに，1932年にヘス指導下でナチ党に設立された「地政学研究委員会」（Arbeitsgemeinschaft für Geopolitik: AfG）は，1937年，ナチス教員連盟に「統合」された。Vgl. Heske, Henning: Und morgen die ganze Welt. Norderstedt : Books on Demand, 2015.

28　Vgl. Bracht ③, S. 70.

以上３点だけ指摘したが，ブラハトの研究は，民族主義詩人マリア・カーレとナチズムとの関係を掘り下げ，まことに興味深い。私には，今回指摘された青年ドイツ騎士団，左派カトリック，リューター（Josef Rüther 1881–1972），また扱えなかった第二論攷にあったタンツマン Tanzmann, Bruno 1878–1939や農民大学，アルタマーネンなどなど――，今後深めてみたいテーマが浮かび上がったことであった。

## 文　　献


1．Hans-Günther Brach: „Maria Kahle auf Missionsreise in Südamerika 1934.“［マリア・カーレ南米特命旅行1934］In: Lippstädter Heimatblätter (in press)［Bracht ①］
2．―――: „Maria Kahles Wirken in der völkischen Bewegung. Ein Beitrag zum Gesellschaftsverständnis der sauerländischen Dichterin.“
［民族主義運動の中でのマリア・カーレの活動――ザウアーラント女性詩人の社会理解論考――］
In: daunlots. internetbeiträge des christine-koch-mundartarchivs am museum eslohe, nr. 71, eslohe 2014, S. 54–63.
（In: http://www.sauerlandmundart.de/pdfs/daunlots%2071.pdf　最終閲覧：2019/05/17）［Bracht ②］
3．―――: „Maria Kahle –als Heimatdichterin und Publizistin–. eine Wegbereiterin des Nationalsozialismus?“
［マリア・カーレ：郷土詩人，出版人としての――ナチズムの先駆者？――］
In: daunlot，nr. 71, 2014, S. 64–71.（同上，最終閲覧：2019/05/17）［Bracht ③］
4．―――: „Öffentliches Auftreten und Unterrichtsmaterialien erweisen Maria Kahle als Volkstumspropagandistin im Dienste des Nationalsozialismus (1933–1937).“
［公的登場と授業資料が物語るナチズム奉仕民族主義宣伝者（1933–1937）としてのマリア・カーレ］
In: daunlot，nr. 71, 2014,S. 72–78.（同上，最終閲覧：2019/05/17）［Bracht ④］
5．―――: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998.（=Studien zur Bildungsreform: Bd. 31. ハンス＝ギュンター・ブラハト著：『民主主義とナチズムの緊張の場における中等学校制度―プロイセン上構学校事例に則した連続性問題論考』，ベルン：ペーター＝ラング社，1998年〈教育改革研究第31巻〉）
6．Bürger, Peter: „Die Liebe zum Führer jubelnd brennt: Maria Kahle (1891–1975) als völkische Pionierin und Botschafterin des Hasses“, In: daulots nr. 71.
In: http://www.sauerlandmundart.de/pdfs/daunlots%2071.pdf　最終閲覧：2019/05/17
7．Heske, Henning: Und morgen die ganze Welt. Norderstedt: Books on Demand, 2015.
8．Kirsch-Stracke, Roswitha: „Straßennamen: Fenster zur Geschichte von Frauen?“, In: daulots nr. 71, S.108.
In: http://www.sauerlandmundart.de/pdfs/daunlots%2071.pdf　最終閲覧：2019/05/17
9．Müller, Saskia/Ortmeyer, Benjamin: Die ideologische Ausrichtung der Lehrkräfte 1933–1945: Herrenmenschentum, Rassismus und Judenfeindschaft im Nationalsozialistischen Lehrerbundes: eine dokumentarische Analyse des Zentralorgans des NSLB. Weinheim: Beltz, 2017.
10. Prominente ohne Maske NEU – 1000 Lebensläufe einflussreicher Zeitgenossen, München: FZVerlag, 2001.
11. 岩崎好成「青年ドイツ騎士団団長 A. マーラウンの政治思想」『山口大学教育学部研究論叢』第１部 人文科学・社会科学，1990.
12. 小峰総一郎『ナチスの教育―ライン地方のあるギムナジウム―』学文社，2019.
13. ―――「「教科書」考―日独瑞の社会科教科書から―」『中京大学教師教育論叢』第８巻，2018/3.
14. ―――「ライン地方のあるギムナジウム（２）序――カーレきょうだい」『中京大学国際教養学部論叢』第７巻第２号，2015/3.
15. ―――『ポーランドの中のドイツ人――第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育――』学文社，2014.

16. 田村栄子『若き教養市民層とナチズム』名古屋大学出版会，1996.
17. 山名淳『夢幻のドイツ田園都市』ミネルヴァ書房，2006.

URL
１．Auszug aus einem Bericht aus dem Sauerlandkurier vom 13. April 2014.
In: http://www.heimatbund-finnentrop.de/rueckbl25.htm　最終閲覧：2019/05/18
２．„Maria Kahle“（ドイツ Wikipedia）
In: https://de.wikipedia.org/wiki/Maria_Kahle　最終閲覧：2019/05/18
３．Brand Maria-Kahle Grundschule Schwäbisch Gmünd
In: https://www.youtube.com/watch?v=WRVhk0qo_B0　最終閲覧：2019/05/18
４．Maria Kahle Gesamtschule der Stadt Bonn
In: http://www.marie-kahle-gesamtschule.de/marie-kahle-courage-zeigen/　最終閲覧：2019/05/18
５．Marie_Kahle_(Lehrerin)
In: https://de.wikipedia.org/wiki/Marie_Kahle_(Lehrerin)　最終閲覧：2019/03/22
６．https://portal.dnb.de/opac.htm?query=Maria+Kahle+Arbeitsbogen&method=simpleSearch　最終閲覧：2019/03/27

（2019. 5. 28）